

個人研究発表要旨

メタ哲学的主張としての概念工学 ——科学との距離について——

岸 俊輔（東京大学本部職員）

本発表では「哲学とは概念工学である」というメタ哲学的主張がどのような含意を持つのかについて、主に科学との関係性について明らかにすることを目標とする。

概念工学 (conceptual engineering) という言葉自体はCreath (1990) が初出とされるが、ここではCreathがCarnapの哲学観を換言した言葉でしかなく、特に積極的な意味を与えられていない。「哲学とは概念工学である」というメタ哲学的主張自体はBlackburn (1999) が初出と考えてよいだろう。以降、哲学を概念工学として捉え、自分達の営為を説明する論者は増えつつある (Eklund, Scharp, Plunkett, Cappelen, etc...)。

しかし、概念工学の内実については論者の間でも明確に定まっているわけではない。概念工学は概念を扱わないし工学もしないという議論 (Cappelen, 2018) もあれば、概念を工学するのではなく概念の倫理を扱うのだという議論 (Burguss&Plunkett, 2014) もある。

これを踏まえて、本発表では「哲学とは概念工学である」というメタ哲学的主張の持つ含意を明らかにし、他のメタ哲学的主張との差分を明確にすることを試みる。特に今回は《工学》に注目し、「概念を工学する」ことがどのようなことなのかを、科学との距離を1つの軸にして考えていきたいと思う。

工学について考えるために本発表では工学の哲学の議論を援用する。それによれば、工学は科学の知見を利用できるものの、それ自体は科学ではないとされる。それは、お互いが目指す目標とアプローチが異なるからである。たとえば、Bulleitらによれば、「工学は科学から知識を提供される」が、「科学が知識を目標とするのに対し、工学は有用な変化を目標とする」とされており、さらにはわざわざ「工学は応用科学ではない」と述べられている。またGoldmanは、科学を必然性や普遍性を志向するものとし

2019年5月15日発行

て、工学はむしろ偶然性や特殊性を志向するものとして、それぞれ特徴づけている。

この議論を踏まえての発表者の主張は以下の通りである。概念工学が工学の一種であるとするならば、「哲学とは概念工学である」と主張するとき、それは「哲学は科学ではない」という反自然主義的主張を含んでいる。と、同時に「哲学は科学的知見を参照可能である」という自然主義的主張も含んでいる。言い換えれば、普遍的な事実の積み重ねとしての科学的知見を参照しつつも、局所的な課題の解決に取り組む、というのが哲学である、ということをこのメタ哲学的主張は含意していると言える。

本発表の結論は驚くべきものでもなければ目新しいものでもないように思える。しかし、このことは決定的に重要である。なぜなら、哲学についての一般的な理解に合致していることは、すなわち「哲学とは概念工学である」というメタ哲学的主張が哲学についての記述的な回答として棄却される道筋をブロックできるからである。